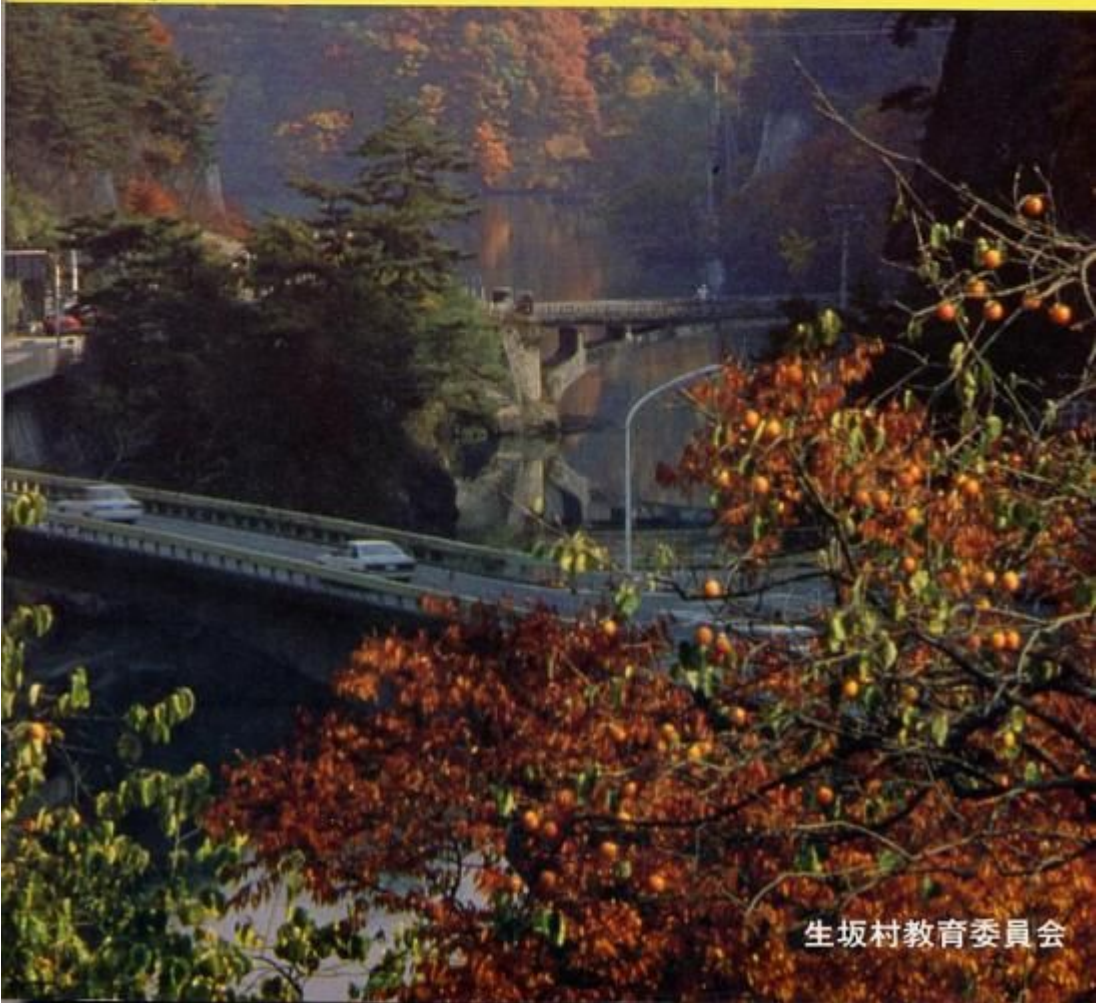


目で見る郷土の誇り

生 坂



生坂村教育委員会

目で見える郷土の誇り

生坂



生坂村教育委員会

『目で見る郷土の誇り、生坂』発刊に当たって



生坂村誌刊行会長 寺島宗正
生坂村長

生坂村はどのような歴史の変遷を経て現在の発展があったのでしょうか。内陸部でありながら日本有数の大きな犀川は古代はどうであったのか、また現在の生坂村の自然、動植物はどうなっているのか、一方歴史のなかや自然、動植物のなかに生坂村として誇れるものはあるのか……。このようにして考えてみるとほとんどが未知のものばかりです。

近世以降の歴史では、一部語り継がれたものもありますが、これはほんとうの一部分です。

それを解き明かし、現代の我々が生坂のすばらしさを見直すと同時に、後世に歴史として残そうというのが今回の村誌刊行です。

昭和57年末よりこの計画が樹立され、村誌刊行会、村誌編纂委員会、専門委員会がそれぞれ組織され、資料の収集、調査等委員の方々の精力的な取組み、また村内の大勢の方から貴重な資料の提供を頂き平成2年度から順次発刊することになりました。

近世では一部記録されたものもありますが、ほとんど記録の無いなか、あらゆる資料を基にして編集に当たって頂いた関係の方々、また先祖代々引き継がれた貴重な資料を提供頂いた大勢の方々に心からお礼を申し上げます。

本書は提供頂いた豊富な資料、写真、図版等、わかり易い内容になっており、特に中学校の生徒にも理解し易いよう平易な文章で表現してあり編集に当たった方々の気配りが伺えるような内容となっております。

今回は「目で見える郷土の誇り、生坂」という題名で平成3年から順次発刊される本誌の内容の一部を写真を主として発刊することになりました。

郷土生坂村にはどんな誇れるものがあるか、この書により認識を新たにし、郷土への愛着を深め、村おこしの一助として頂ければ幸甚と存じます。

来年度から発刊される村誌を村内の皆様方にはもちろん、村出身の方々並びに多くの生坂村にゆかりのある方には是非ご購入頂きますようお願い申し上げます、私のことばといたします。

I. 地形 natural features

自

1. はじめに

江戸時代のはじめ、上生坂照 明寺の僧良 蓮のもとらした煙草の種が生坂谷一帯で栽培されるようになり、江戸時代から生坂煙草の名称で盛んに各地に売りさばられました。それが全国に有名を得た歴史的な由緒の誇りと、その名の愛着にちなんで「生坂」の村名が生まれたといわれます。「生坂」——その地名は、「いくつもある坂道」という意味から出た地名のようです。同じ「生坂」の字を用いた土地は、岡山県倉敷市の山寄りの地域に存在しています。同じような立地環境の所でしょうか。

多くの集落は、犀川の曲流と山に囲まれて、河岸段丘ごとに隔たっているのが特徴です。古くから小立野村・下生野村・上生坂村・下生坂村・日岐村・草尾村・大日向村・宇留賀村などと、段丘を単位に村々が営まれました。

犀川とともに南北性の山並みは、生坂谷と東西地域の往來を妨げており、その交流を没交渉にさせました。村域で初めて犀川に橋が架けられたのは、山清路の絶壁を切り開いた馬車道の木橋でした。明治34年の

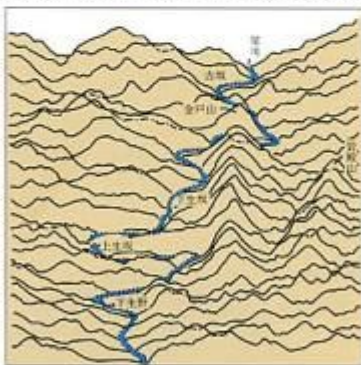
ことです。もっぱら対岸との往來は、10か所余の渡し船に頼っていたわけです。

犀川から一気にそそり立つ生坂山地の峰々、荒々しいV字谷を刻む山清路をはじめ、生坂村に広がる大地は、2600万年前ごろ、陸地であった本州の中央部が陥没して、そこに生じたフォッサ・マグナの海に生まれました。

海底は、数回の猛烈な海底火山活動や、地盤変動によって次第に押し上げられて、海は北方へ退いていきました。生坂村から完全に海が消えたのは、300万年ほど前の大昔でした。

その陸地には、やがて古犀川や古高瀬川などが流れ、陸地は上昇して、大城山などの岩山がそびえる生坂山地や緩やかな山稜の犀川丘 段地が造られました。

そして数十万年前から、不連続な上昇が進むことによって、犀川は曲流しながら大地をどんどん掘り下げ、兩岸に階段状の平坦面を残し、また「耕して天に至る」という山村風情を呈する傾斜農地を生み出したのです。



生坂村の地形断面 (水平: 垂直 = 1 : 2)



「耕して天に至る」傾斜農地 (昭和30年ごろの旧陸田村有明付近)



ダム湖に没した山清路の昔日



上生坂西手の渡し (昭和34年)

2. 位置

東筑摩郡の西北端を占める生坂村は、長野県の北西部中央寄りに位置します。

村役場は、東経137°55'16"、北緯36°25'02"、標高519mの地点に所在しています。この経緯度は、東方では浅間山を越えて群馬県桐生市、栃木県栃木市、太平洋岸の茨城県那珂湊市などに当たります。また西方は、燕岳や富山岐阜の県境の山並みを越えて、日本海岸の石川県小松市と並びます。北方は、新潟県能生町、南方は伊那市を通り、静岡県袋井市などが延長上に位置します。



生坂村の村界



生坂村の位置

方位	地点	東経	北緯
東端	下生坂区重東北端被岸沢の東筑摩郡・更科郡郡境点	137°59'53"	36°27'28"
西端	昭津区長谷久保西の平出沢617m標高点	137°54'32"	36°26'11"
南端	小立野区南端大内沢と犀川合流点町村界	137°56'01"	36°22'42"
北端	古坂区久保北方755m標高点西村界	137°56'58"	36°29'10"



山あい広がる生坂村の中心部上生坂（池田町 富平より）

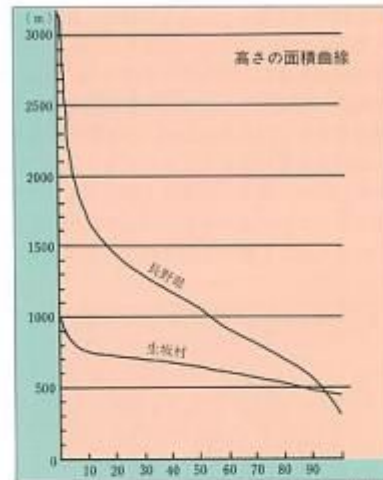
3. 標 高

生坂村は、標高455～1,007mの範囲に所在します。高さの面積曲線によると、ほぼ丘陵性の状態を示します。

人口の集まる単川沿いなどの地域は、標高460～550mの範囲に分布します。この高さは、長野盆地（320～400m）、上田盆地（400～600m）より高い位置にありますが、松本盆地（520～780m）、伊那盆地（500～700m）、佐久盆地（600～900m）、諏訪盆地（760～1,000m）よりは、はるかに低い位置に分布します。

四圍を村内に置く最高地は、生坂山地の山並みで京ヶ倉（990m）、大城山、^山楮山と続き、遠見・丸木など小立野入の集落は、高所に散在する集落といえます。

一方陸郷・広津の山地は、山頂が平坦な山容で、標高も700～850mの範囲内にあります。白日・草尾・昭津・宇留賀・古坂などに含まれる集落が散在しており、傾斜地農業が営まれています。



生坂村各集落の標高

生坂村各集落の標高				標高の単位 (m)						
小立野区	小立野	500～550	水穴	680～700	入山	590～660	昭津区	長谷久保	590～730	
	清水	540～700	大地	540～560	丸山	620～650		塚の目影	690～710	
	荻ノ原	610～620	池沢	530～550	吉坂区	久保	460～490		太久保	620～670
	遠見	740～760	根峯	520～580		上ノ平	520～580		下ノ田	550～610
	池沢	640～680	仁本	610～620	宇留賀区	上手	650～680	草尾区	梶本	480～560
	丸木	660～680	上生坂	485～530		鷺平	480～490		草尾	485～510
	豊久保	670～680	関原	530～550		会	480～520		牛沢	490～500
	高松	680～710	万平	610～620		宇留賀	480～510		柚山	550～610
	寛穴	640～670	小舟	500～550		太郎	550～580		草尾山	670～750
	清久保	630～680	下生坂	490～520		寺沢	540～570	日岐区	日岐	500～530
	日向	640～650	木村	510～530		石畑	650～670		真日岐	490～510
	下池	620～640	竹ノ本	490～500		才史寺	490～530		遊上	495～500
	古留敷	680～690	雲根	480～510		大岩	530～560		大岩	670～705
下生野区	下生野	500～540	込地	480～500	大日向区	北平	480～520		大倉	640～690
	白牧	670～680	日向	530～540		南平	480～530		原	650～695
	峯	620～630	重	520～540		中塚	570～590			



山腹に散在する古坂の集落

4. 面積

東西に最も幅の広い所は、長谷久保北西の村境と、池沢東方の鷹打ち場の間で、7.150mを測ります。南北は、小立野南端の大内沢と犀川の合流点から古坂北方の村境まで12.130mを測り、南北に細長い五角形を示します。

村の面積39,256haは、長野県面積の0.29%に当たり、県内で村制をしく67村中54位で、小さい村の部に入ります。

東筑摩郡2町8村中では、四賀村・朝日村・波田町・明科町に次ぐ面積になります。

村内で最も広い地区は下生坂区で、村全面積の $\frac{1}{3}$ に近い割合を占め、群を抜いています。犀川を挟む東西の面積比は、ほぼ2対1で、一般に西側は町村合併の関係もあって小地区になっています。また、高さによる面積比は、段丘など550m以下の平坦部が29%と少なく、大部分が傾斜地という山村の特徴を示しています。



生坂村各区の面積割合 (生坂村森林基本図より作成)

生坂村各区の高さによる面積

面積の単位 (ha)

高さ区分(高さ)	小立野	下生野	上生坂	下生坂	日岐	草尾	昭津	大日向	宇留賀	古坂	合計
500以下	25.6	17.1	83.2	109.3	36.4	47.7	9.5	44.4	61.4	31.6	466.2
500～550	45.6	72.2	99.0	162.6	73.2	54.2	14.8	57.4	65.0	27.6	671.6
550～600	52.9	54.9	69.7	189.9	48.6	70.0	30.6	53.2	59.7	35.9	665.4
600～700	188.0	164.0	80.8	350.9	78.5	81.6	65.2	62.7	82.7	59.1	1213.5
700～800	100.0	172.1	34.4	197.0	2.8	21.1	15.8	6.3	20.6	34.6	604.7
800～900	8.5	106.3	25.6	108.6					1.5	7.3	257.8
900～1000		17.3	7.3	21.1							45.7
1000以上				0.1							0.1

(国土院2万5千分の1地形図より作成)



▲森に囲まれた山腹の長谷久保
◀下生坂段丘を突走る国道19号

5. 河川

村域を流れる河川は、曲流しながら縦断する犀川に代表されます。麻績川・金鑑川をはじめ天神沢・池沢・楯沢など大小合わせて160余の溪流が流れています。

犀川は、明科町で高瀬川などを合流した後、村域を19km、善光寺盆地の出口の両部峡まで64km、山あいを流れます。平均勾配 $\frac{2.3}{1000}$ 、山間地を流れる川としては、梓川の $\frac{31}{1000}$ 、高瀬川の $\frac{50}{1000}$ には比較にならない緩やかな流れです。流域面積はアルプス、松本盆地、犀川丘陵地などを合せて3,400 km²。長野県の流域面積のほぼ $\frac{1}{4}$ に及ぶ大河ですが、本流である梓川-犀川の名は、日本の大河の中にその名は出ていません。それは千曲川-信濃川の支流であるからです。

犀川の名は、鎌倉時代から記されていますが、公式名は、明治12年に生まれました。犀電・泉小太郎伝説にちなんで名付けられたといわれます。



水門をあげた生坂ダム



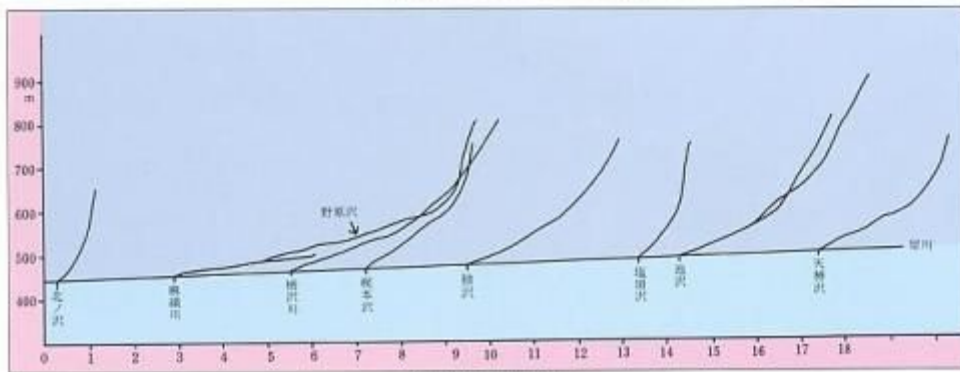
金鑑川の峡谷（大岩より）



岩を喰む麻績川
（込地トンネル横）



犀川の流れをまたぐ日野橋
（橋の右側は旧陸郷村牧場）



生坂村の河川勾配曲線

6. 河岸段丘

犀川やその支流の兩岸には、主な生活舞台となっている河岸段丘が発達しています。これは、兩岸の山地が隆起性であることから、山地の上昇に伴って数十万年の大昔より、犀川が旺盛な下刻作用を進めたからです。

生坂谷を眺める景勝地の日岐区白日の尾根筋などから現在の河床まで、古い犀川の流路に沿って200mも岩盤をうがって下降しているのです。

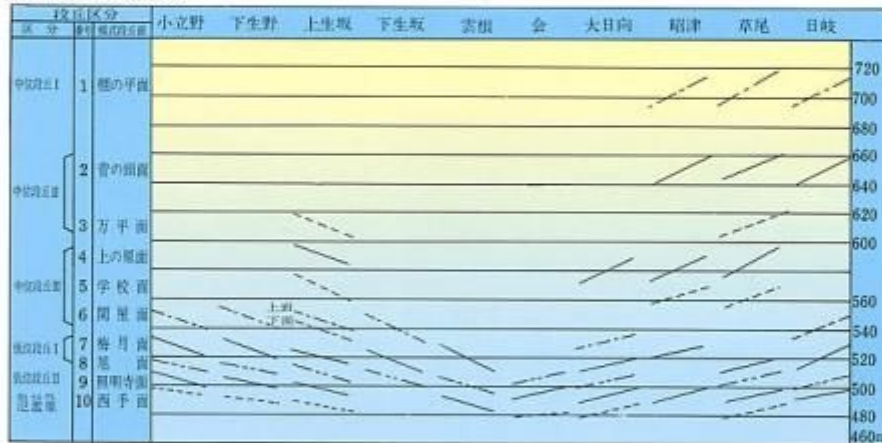
平均勾配 $\frac{2.3}{1000}$ という山間地を流れる川としては、非常に緩やかな流れですので、曲流が著しく、流路の変遷に伴って複雑に何段もの河岸段丘を刻んでいます。

上位から中位段丘Ⅰ・中位段丘Ⅱ・中位段丘Ⅲ・低位段丘Ⅰ・低位段丘Ⅱの5段丘に大別されます。おおよそ、中位段丘Ⅰは更新世中期の初め(60万～50万年前)、中位段丘Ⅱは更新世中期後半(30万～15万年前)、中位段丘Ⅲは更新世後期(15万～3万年前)、低位段丘Ⅰは完新世初期(1万年前以降)、低位段丘Ⅱは完新世後期(3,000年以降)に形成されたものと考えます。

段丘面には、表土の下に基盤岩に重なってかつての河床礫が堆積しています。2m内外の厚さが一般的です。小立野段丘など扇状地堆積物に覆われている段丘や草尾上原のように火山灰に覆われている地域を除き、一般に表土は薄く、河床礫があらわになっている所が目立ちます。

段丘面には、表土の下に基盤岩に重なってかつての河床礫が堆積しています。2m内外の厚さが一般的です。小立野段丘など扇状地堆積物に覆われている段丘や草尾上原のように火山灰に覆われている地域を除き、一般に表土は薄く、河床礫があらわになっている所が目立ちます。

上位から中位段丘Ⅰ・中位段丘Ⅱ・中位段丘Ⅲ・低位段丘Ⅰ・低位段丘Ⅱの5段丘に大別されます。おおよそ、中位段丘Ⅰは更新世中期の初め(60万～50万年前)、中位段丘Ⅱは更新世中期後半(30万～15万年前)、中位段丘Ⅲは更新世後期(15万～3万年前)、低位段丘Ⅰは完新世初期(1万年前以降)、低位段丘Ⅱは完新世後期(3,000年以降)に形成されたものと考えます。



小立野段丘



現河岸より200mもの高所に
残る旧河床礫（日枝白目）



上生坂の段丘群



下生野段丘



草尾上の那段丘



雲根段丘（中央池原は会段丘）



大日向段丘

II. 地質

1. 大地は語る

長野県の西部を占める飛騨山脈は、標高3,100mにも達する猛猛しい山容で、明治14年イギリス人ウィリアム・ゴッランドによって、初めて日本アルプスの名称が用いられました。この地域は御岳・乗鞍など火山地域を除くと、古生代中ごろ～中生代（2.5億～0.7億年前）にかけて海底に堆積した粘板岩・硬砂岩・石灰岩などと、それらを買入した花崗岩などから成り立ちます。

これに対して、松本盆地の低平地を挟んだ東側には、標高も1,500mを越す所の少ない山頂のなだらかな筑摩山地が広がります。この山地は、新生代第三紀中期～第四紀（2,600万～200万年前）に当時の海底に堆積した泥岩・砂岩・礫岩などと、海底火山の噴出物が変質した緑色凝灰岩や安山岩などからできています。この両者の違いは、地層のできた時代の不連続です。筑摩山地以北はフォッサ・マグナと呼ばれます。

フォッサ・マグナは、「大きな割れ目」という意味で、中央地溝帯、大陥没帯とか訳されています。これは明治8年に来日したドイツ人の地質学者エドムント・ナウマンによって名づけられました。

当時、日本の陸地を造っていた中生層、古生層の地層が、断層に切られて陥没しました。この陥没した地域に太平洋と日本海から浸水してフォッサ・マグナの海ができたのです。この海の西縁は、新潟県糸魚川市から仁科三湖、松本・諏訪・甲府各盆地の西部を通り静岡市を結ぶ線で境され、糸魚川・静岡構造線と呼ばれます。

一方東縁は、八ヶ岳などの火山噴出物に埋められているため、境界ははっきりしません。佐久市岩村田から千曲川上流部に沿って、山梨県須玉町若神子に延びる断層線という考えと、新潟県柏崎市から千葉県銚子市を結ぶ断層線ではないかという意見もあります。



天空にそびえる雲の北アルプス（明科町 先北村より）



人跡も途絶える急峻な入山谷（重より）



フォッサ・マグナの海に堆積した筑摩山地の山並み（池田町入ノ入より）